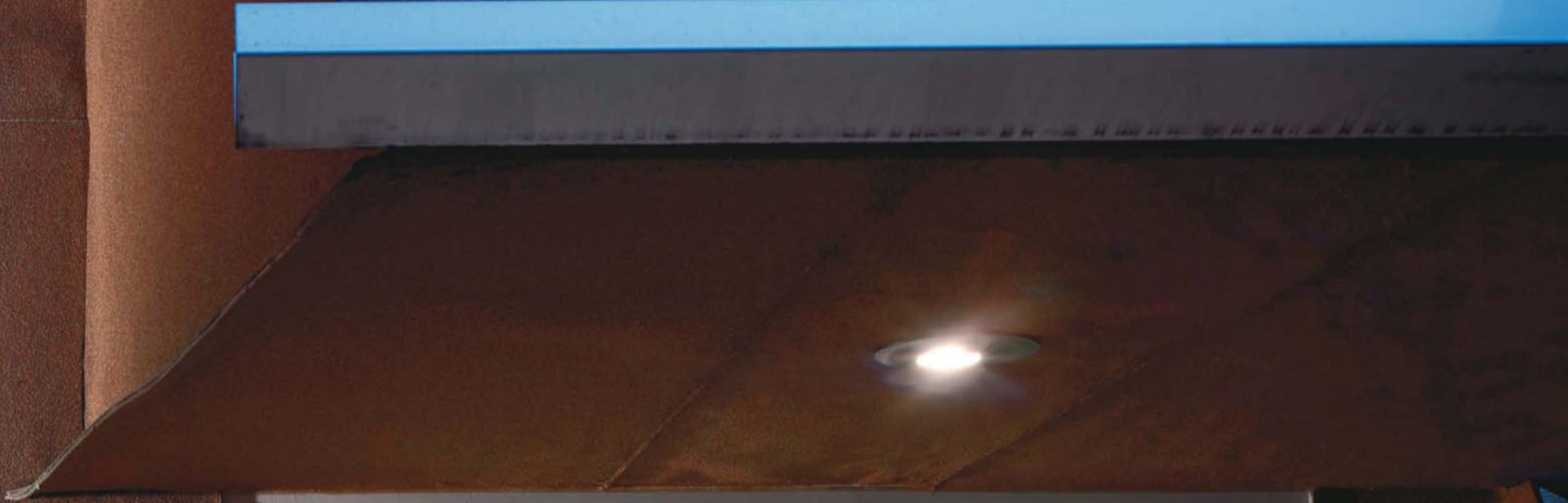


WEST PRESS 3



DISCUSSION WEST meets 塚本 由晴

「東京という都市が卓越するために何ができるか……住宅をつくりながら考えていきたい」

建築家・梅林克が興味を持つ建築家たちを訪ね、ディテールに対する考え方や設計手法を聞くシリーズ。第3回となる今回は、建築家・塚本由晴の自宅兼事務所「ハウス&アトリエ・ワン」を訪ね、住宅に込められた都市へのメッセージを聞いた。「ハウス&アトリエ・ワン」では住宅と仕事場に明確な境界がない。近隣とはお互いの風景を何となく見合いながら共存する、ユーモラスな関係性ができている。「建築は道具ではなく治具のようなもの」と語る塚本。世代交替を重ねたさまざまな世代の住宅が集積する東京という都市の複層的な魅力を発見し、小さな住宅をつくることで町全体を面白くする。個別化という役割を終えた住宅に、これからどんなことができるのか。その方法を教えてもらった。

梅林 だけど、「ハウス&アトリエ・ワン」は、私から見ると不思議な構成です。自宅と仕事場が、明確な境界なしに共存しています。ここには住宅の一般解としての提案が込められていますよね。

塚本 個別にも対応しているけど、同時に大きな方向性を考えてつくっています。郊外住宅地が開発された1920年代から約90年が経ちましたが、日本社会の変化は強烈です。およそ30年ごとに建物の形も変わり、法規や材料、工法、家族観もそれぞれ違います。現在の住宅地ではいろんな時代の住宅が建て替えられながら、脈絡なく共存している状況にあります。ただ、これまでの住宅は家族をコミュニティから独立させ、個別化する装置として使われてきました。現代の社会は家族から個人という単位に分かれて、直接お金を徴収する仕組みもできて、資本主義における究極的な状況となりつつあります。ここまで来ると、住宅にとって個別化という役割は終わっています。将来的にできるのは、つないでいくことやシェアしていくこと。そして、ひとつの敷地にひとつの家をつくる仕組みなので、必ず隙間ができますね。その隙間の質を上げること。そういったことを、住宅をつくりながら考えたんです。

梅林 近所の家の壁や屋根が、不思議な借景になっています。紋切り型のコミュニティとはちょっと違った関係性が感じられます。

塚本 コミュニティと言われているものは、挨拶やおしゃべりをして、家を行き来しないといけないような感じがします。そういう関係はなくても、お互いに見合う関係というのかな。例えばいつも庭を手入れしているおじさんがそこにいるんだけど、しばらく外に出てこないから部屋で倒れているかもしれない、と気付くことができる可能性がある。そんなふうにはセキュリティ意識を持った街をつくり上げていくことを考えているんです。

梅林 この界限は、震災には遭ったんでしょうか？

塚本 戦争も、関東大震災も大丈夫だったそうです。地面から約6m下に柔らかな地盤があるんです。元の土地の持ち主だったのは建設会社で地質調査をしていた方なのですが、彼は「天然の防震構造」と言っていました。もともとは敷地内に道路が通っていたんです。南側には暗闇坂という坂があって、坂から上がってくる空間の流れが敷地にあるので、街の隙間に住んでいるような感覚があります。

梅林 だからいろんな世代の建物が共存しているんですね。地縁は残ってますか？

塚本 残ってますよ。新参者は入れません。

梅林 東京では珍しいですね。モダニズムの時代は現状を否定してソリューションとして建築を提示する、という方法が取られていたけど、僕らぐらいの世代から、まずは今ある状況を肯定し、新しい環境をつくり出すことを考えるようになりました。その考えを提示するにはここは絶好のサイトですね。

塚本 外国人は東京を、何十年かの人々の営みの積層に見えて親しみが持てる都市だと言います。ロンドンやパリに比べて日本の方が、生活の内容が表に出ていると。それぞれの都市がそれぞれ違う背景を持っているのだから、ある卓越した状態を示せばいいんです。パリは19世紀、ニューヨークは20世紀に卓越した状況に達しました。東京が卓越するならば、持っているものを伸ばせばいい。新しくつくるエネルギーもないですから。いまの東京は面白いところまで来ているので、卓越までに何ができるか……住宅をつくるのは芥子粒より小さい営みですが、言葉と一緒に考えていきたいんです。

梅林 ほとんど住宅でできている都市なんて、東京くらいです。ジャン・ヌーヴェルも東京の夜景は世界で一番きれいだと言っていたのをどこかで読んだ事があります。

塚本 成田から横浜上空を通過してヨーロッパに向かう便があるんですが、それに乗ると光の一個一個が小さいから、すごくキラキラして見えるんです。

梅林 大きなレベルで俯瞰して見てもTOKYOでしかない独特の「質」がある。

塚本 東京は人口がものすごく多いので、モノの流れが圧倒的に多いです。水が流れ、熱が発生し、あらゆる流れが強い総体として尋常じゃない大きさに達しています。さらに、人が住むエリアには、ストラクチャが必要になります。たとえば、渋谷と新宿をつなぐ高速道路が東名高速に連続する大橋ジャンクションができましたが、まわりが住宅地なので音を漏らさないために内部空間化され、圧倒的な構造を持つモニュメントとなっています。モニュメントとは歴史を記憶するためにつくられるものですが、日本ではインフラがモニュメントとなっています。巨大で荘厳なのですが、裏側にある意味はプラグマティックですね。

個別化という役割を終えた後の、住宅のつくり方



アトリエ・ワン

塚本 由晴 | つかもと・よしはる
建築家、東京工業大学大学院
准教授、博士(工学)
1965年神奈川県生まれ
1987年東京工業大学工学部
建築学科卒業
1987-88年パリ建築大学ベルビル校
1992年貝島桃代とアトリエ・ワン設立
1994年東京工業大学大学院博士
課程修了
2000年-現在同大学大学院准教授
2003、07年ハーバード大学大学院
客員教員
2007、08年UCLA客員准教授



House & Atelier Bow-Wow

IP、3P House & Atelier Bow-Wow 設計: Atelier Bow-Wow



WEST VOICE

塚本さんが、「建築を持ち歩く」という表現で、家の部品として「鍵」を捉えていらっしやったのが印象的です。大切な家そのものの代表として鍵を考えると、建築金物の役割も変わってきそうですね。WESTは、この夏、東京・南青山に新しいショールームをリニューアルオープンします。ぜひAgahoに触れていただき、大切な建築の一部としてお選びいただきたいと思います。

WEST代表取締役社長 西康雄・談

梅林 「ハウス&アトリエ・ワン」の建物は、意外と身体的なものづくり方をしていますね。壁や天井に木が張られていたり、柱が不思議な折れ曲がり方をしていたり。

塚本 リノベーションと間違われたこともあります。後からペンキを塗ったり木を張ったりしたようにも見えるみたいですね。現場で少しずつ修正をしていくので、当初考えたものとも違うものになるんです。

梅林 家と仕事を分ける仕切りはなさそうですが、何らかのルールをつくることで済ませているんですか？

塚本 食事や打ち合わせをするスペースの上の階は、うちのリビングです。基本的にリビングにつながる階段から上にはスタッフは上がって来ません。上の階に行くには、その階段の前でスリッパを脱いでますね。

梅林 普通なら既製のプロダクトを使うところに、使っていないですよ。ガチャッと閉めて、鍵をかける、というものではない敷居のようなものがある。たとえば茶庭なんかでも入ってはいけないという事を示すのに石を置く事で示す。住宅の中にそういった敷居や作法を作り上げるプロダクトはなかなかないですね。

塚本 建築はひとつずつつくるので、道具とはちょっと違う。どちらかというと、ある特定の行為 — たとえば、木を一定角度に切ること — を誘導するための器具である「治具」のような存在です。「道具」はどこに持って行っても役に立ちますが、治具は単体では役に立ちません。建築は、人間がある場所に居つかせる治具のようなものでいいんじゃないかと思うんです。

梅林 家に必ず必要な道具のひとつに、鍵がありますね。この家の中に鍵は使われていますか？

塚本 トイレと寝室くらいかな。

梅林 考えてみれば日本では、玄関に鍵は用意しても、家の中に鍵はあまり登場しないですね。そこまでの個人主義にはならないので。

西 鍵って、それを受け取った瞬間に、家が自分のものになるんです。

寶角 車でもそうですが、鍵は所有の証ですね。WESTの鍵には、3つの穴を開けてあります。穴ごとに重心が違うので、鍵をいくつも持っても、キーホルダーに通す穴の位置を変えれば見分けがつく。パッと広がるから探すのが楽なんですよ。

塚本 なるほど。重さやサイズも、人間の感覚に合っているんですね。それに、建築の部品を持ち歩いているようなものとも言えますね。



Next

WEST meets Felix Claus

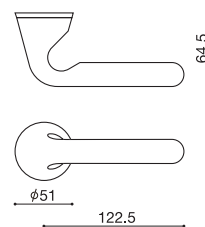


House in Jingu Mae

Photo: Christian Richters



Agaho basis Lever Handle 148



WEST CORPORATION

TOKYO OFFICE / SHOW ROOM *2010.AUG OPEN
5-11-15 MINAMI-AOYAMA, MINATOKU, TOKYO, 107-0062 JAPAN.
TELEPHONE: 03-3499-9260 FACSIMILE: 03-3499-9263

OSAKA OFFICE / SHOW ROOM
4-3-22 IMABASHI, CHUOKU, OSAKA-CITY, OSAKA, 541-0042 JAPAN.
TELEPHONE: 06-6221-5777 FACSIMILE: 06-6221-5888

株式会社ウエスト

東京オフィス/ショールーム *2010年8月オープン
107-0062 東京都港区南青山5丁目11番15号
TEL: 03-3499-9260 FAX: 03-3499-9263

大阪オフィス/ショールーム
541-0042 大阪府大阪市中央区今橋4丁目3番22号
TEL: 06-6221-5777 FAX: 06-6221-5888

WEST PRESS 3

2010年4月26日発行

Art Direction:
藤脇慎吾
Text:
平塚桂 (はむ企画)
Photo:
繁田諭 (Nacása & Partners Inc.)
Edit:
publica